研究資料

新出「いろは譬尽」と「たとゑづくしいろは歌當和訓」の解題と影印・翻刻

学芸学部・日本語日本文学科　吉海直人

A「いろは譬尽」

一

先に「世話いろは新絵解」を紹介した際(1)、従来のいろはかるた研究者は女子用往来や百人一首の頭書にあまりにも無関心ではなかったか、と警告めいたことを述べた。百人一首の場合、絵入版本が千種以上刊行されており(2)、かるたの現存数をはるかに上回っているからである。いろはかるたにしても、版本の頭書などに掲載されているものは、予想以上に多いのではないだろうか。果たしてその後、たまたま入手した『小野篁歌字尽』の頭書に、これまた奇妙な「いろは譬尽」が掲載されていたので、ここに紹介させていただく次第である。

まず『小野篁歌字尽』の簡単な書誌を記しておきたい。影月堂文庫蔵。表紙は改装であり題簽もないので、正式な書名は未詳である。ただし内題に「小野篁歌字尽」とあり、また柱に「歌字尽」とあるので、『小野篁歌字尽』でまず間違いないと思われる。改装の際、二種の「小野篁歌字尽」を合綴したようで、前半と後半に版種の異なる二つの「小野篁歌字尽」が存する。幸い末尾に板元名が記されていた。前半は「大坂船町天満屋／玉水源次郎新版」とあるので、大阪の天満屋（玉水）源次郎板であることがわかる。後半は「京松原通西洞院東入町／美濃屋平兵衛板」とあることから、京都の美濃屋平兵衛板ということになる。

寸法は、タテ21.0㎝×ヨコ15.1㎝。緑がかった灰色の改装表紙が付けられている。改装の際に付けられたと思われる遊紙前後各一丁。墨付は前半6丁半、後半7丁半となっている。末尾の半丁は改装の際に切除されたのであろう。また前半の丁付けを見ると、三丁目から始まっているので、前の二丁（口絵か）が欠落していると考えられる。後半に落丁は認められないものの、丁付けは三丁以降三四、五六、七八、九十と飛丁になっている。

どちらにも刊年記載がなく、刊行年は未詳であるものの、後半の方がやや古そうに見える。試みに坂本宗子氏編『享保以後板元別書籍目録』（清文堂）で調べてみたところ、前半の天満屋源次郎については、

天満屋源次郎　宝暦四年十月―文化六年四月　大坂船町　玉水氏

とあり、宝暦から文化にかけて活躍した書肆であることがわかった。一方後半の美濃屋平兵衛は、

美濃屋平兵衛　宝暦六年九月―明和七年十二月　京都

とあって、やはり宝暦・明和頃の書肆であった。参考までに井上隆明氏著『改訂増補近世書林板元總覧』（青裳堂書店）にあたってみたところ、天満屋源次郎については、

◎天満屋源治（二、次）郎　文瀾堂　玉水氏
大坂北浜西横掘船町
謡本　正徳3
五行床本目録　寛政7合
播州皿屋敷（為永太郎兵衛、浅田一鳥）
＊天保三年の篤組。五年七月休業（大坂本屋仲間記録）

とあって、天保五年七月には休業していることがわかる(3)。すると少なくとも刊行はそれ以前ということになる。次に美濃屋平兵衛については、

◎美濃屋平兵衛　松寿軒　京松原通新町西入北側、同通西洞院東入（寛延三年百人一首、安永九年謡本）、高辻通新町西入（嘉永六年諸問屋名前帳）
宮古路大寄蔵（正本）　享保カ
一枚摺・両頭人間の一枚摺　天保7
＊合羽摺の美濃平である。

と記されていた。所在地が三つ記されているが、『小野篁歌字尽』の刊記と合致する住所ということになると、寛延三年から安永九年頃の出版ということになりそうだ。

二

以上の書誌を踏まえた上で、天満屋源次郎版の百人一首版本を『百人一首年表』で探したところ、奇妙なことに宝暦十一年と文化十四年に集中していた。まず宝暦版だが、

①宝暦十一年六月刊『題林百人一首女考鑑』　天満屋源次郎他版　北尾雪抗斎画
②宝暦十一年十二月出願『光文百人一首明錦』　天満屋源次郎版　田中友水子作
③宝暦十一年十二月出願『花洌百人一首玉締』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画
④宝暦十一年十二月出願『倭玉百人一首信鏡』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画
⑤宝暦十一年十二月出願『大冠百人一首都巻』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画
⑥宝暦十一年十二月出願『金峯百人一首要筥』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画
⑦宝暦十一年十二月出願『五正百人一首宝台』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画
⑧宝暦十一年十二月出願『聖徳百人一首綾袋』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画

と一挙に八点があがっている。ただしこのうちの②から⑧までの七点は、①の『題林百人一首』の口絵を変えただけの改題本である。このことは『享保以後大阪出版書籍目録』の宝暦十一年項に、

光文百人一首明錦　一冊
花洌百人一首玉締　一冊
倭玉百人一首信鏡　一冊
大冠百人一首都巻　一冊
金峯百人一首要筥　一冊
五正百人一首宝台　一冊
聖徳百人一首綾袋　一冊
以上の七種は天満屋源次郎所持の「題林百人一首」と題せしものに口絵を彫足しそれぞれ改題願出
板元　天満屋源次郎（船町）
出願宝暦十一年十二月

と記されている。要するに同じ版木を用いて、口絵と書名を異にしているわけだが、一度にこれだけの版種を出す意図がよくわからない。

文化版はその宝暦版の再版本であるが、

⑨文化十四年正月刊『光文百人一首明錦』　天満屋源次郎版　田中友水子作
⑩文化十四年正月刊『花洌百人一首玉締』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画
⑪文化十四年正月刊『金峯百人一首要筥』　天満屋源次郎版　北尾雪抗斎画

の三点があげられる。また百人一首以外に往来としても、

⑫元文三年以前刊『新改要文章』　天満屋源次郎版
⑬明和元年九月出願『女要千代玉章』　天満屋源次郎版
⑭明和元年九月出願『女要筆のしらべ』　天満屋源次郎版

の三点がみつかった。

こうしてみると、文化版は再版であるから、天満屋源次郎はやはり宝暦期に活躍した書肆であると判断される。「いろは譬尽」を頭書にした『小野篁歌字尽』も、宝暦頃の刊行と見てさほど大きな狂いはなかろう。

三

さて肝心の「いろは譬尽」だが、同名で歌川国美画の一枚刷「新板いろはたとゑ尽」（幕末明治初期刊）が知られているので比較してみたところ、収録していることわざは大きく異なっていた。もともと天満屋源次郎版は大阪の書肆であるから、普通に考えればことわざは上方系になるはずである。もっとも完璧な上方系などほとんど望めず、必ず江戸系などが混ざっていることの方が多い。「いろは譬尽」に関しても、「油断は大敵のもと」「背中にはらはかへられぬ」という典型的な江戸系が二つ含まれていた。

ただし「いろは譬尽」の成立を考えれば、上方系と江戸系のいろはかるたが混じり合って誕生したものではない。むしろ両系統のかるたが成立する以前、たとへかるたがいろはかるたに推移する過程における過渡期的な混沌とした姿を留めていると考えたい。そのことは時田昌瑞氏が、

実際のところ、いろはカルタは〈上方系〉と〈江戸系〉との二系統だけではない。筆者の調査では、江戸時代のものに限定した場合、カルタ形体ではない落書・評判記・番付・浮世絵などの二次史料のなかに、第三の流れと言えるほど体系だっているものではないが、〈上方系〉でも〈江戸系〉でもないいろはカルタの存在を数多く確認した。　（『いろはカルタ辞典』岩波書店・89頁）

と述べておられることと合致する。時田氏はカルタを主体にしておられるので、かるた形体（形態）でないものを二次史料とされておられるが、実際のところはカルタ形体の方が二次史料ではないだろうか。もっとカルタ形体でないものに研究者の注目が集まれば、いずれそちらの方が数においても勝るに違いない。

それはさておき、「たとへかるた」から「いろはかるた」への移行がどのように行われたのかは、まだ明らかにされていない。五十枚あるいは百枚という歌かるた

に属する「たとへかるた」は、百人一首と同様にいろはの一字一枚に限定されておらず、また同じ字で始まることわざが何枚もある一方、まったく用いられていない字も少なくない。それがいろは四十七枚に絞り込まれることで一字一枚に整理され、それに「京」が加えられて四十八枚に統一される。しかも冒頭の一字を表示する形式に関しては、「いろは短歌」の存在が大いに影響を及ぼしていることを先の『世話いろは新絵解』の解題で述べた。

それを踏まえた上で「いろは譬尽」に目を向けると、上方系と一致することわざが多いだけでなく、たとへ系と一致するものも多いことがわかる。最も注目すべきは、なんと「京」がなく四十七で終わっていることである。これがいろはかるた以前の姿と見る最大の根拠である。

四

続いて「いろは譬尽」に収録されていることわざについて、他のかるたと比較しながら考察してみよう。時田氏の分類を参考に、たとえ系・上方系・江戸系に分けてみたところ、たとえ系二二、上方系二一であり、わずかながらたとえ系が多いことになる。特に「たとえ五十句かるた」と八つも一致しており、古態を留めていることは明らかであろう。

興味深いことに、先の『世話いろは新絵解』とは最大二三も一致していることがわかった。しかも「鬼の目にもなみた」・「用心にはなはをはれ」・「立よらは大木のかけ」・「両方きいて下知をなせ」・「むぎめしで鯉つる」・「牛に引かれて善光寺まいり」・「山のいもがうなぎになる」・「下戸とはけものはない物」・「富士の山をありがせゝる」・「しゃくしぜう木」の一〇種は、かなり珍しいことわざである。そのうちの「れ　両方きいて下知をなせ」は、『世話いろは新絵解』では「り　両方きいて下知をなせ」とあって冒頭文字が異なっている。また「用心にはなはをはれ」は「用心に縄を綯え」の方が一般的であろう。

この「いろは譬尽」には、どの系統にも属さないことわざも六つあり、このことも特徴の一つに数えられる。その中で、「利をつのって非におちる」は、「理に勝って非に落ちる」の方が一般的であろう。唯一「俳ゆういろはたとへ」に「利があって非におちる」とあるのが注目される。「そんすりゃ徳する」は「損して得とれ」が一般的であろう。国美画の「いろはたとゑ尽」にも「そんすりゃとくする」と出ている。「ならはぬ経はよまれぬ」、「蟻のあなから堤もくずれる」は、従来古い例がないと思われていたものである。「もへくひには火がつきやすい」は「焼け木杭には火が付きやすい」の方がよく知られている。「すゞめの千声より鶴のひとこえ」は、後半の「鶴の一声」に短縮されて「つ」になっていることが多いようである。

今回は『小野篁歌字尽』の頭書にある「いろは譬尽」を紹介したわけだが、『小野篁歌字尽』には他にも「児童教訓いろは歌」などを掲載している事例がある。高橋愛次氏著『伊呂波歌考』（三省堂）にも、「小野篁歌字尽」附載の児童教訓いろは歌が紹介されていた。所収版本としては、刊年未詳の糸屋市兵衛版・天満屋安兵衛版・無刊記版の三本が記されている。天満屋安兵衛の名が見えるので、刊行は「いろは譬尽」に近いものであろう。「小野篁歌字尽」は丁数も少ないので、頭書に何か掲載するとすれば「いろは歌」の類が最適なのかもしれない。他の往来物類も丹念に探せば、もう少し新出資料を発掘できるかもしれない(4)。

〔注〕

(1) 吉海「『世話いろは新絵解』の解題と影印・翻刻」同志社女子大学学術研究年報57・平成18年12月

(2) 吉海『百人一首年表』（青裳堂書店）平成9年10月

(3) 『大坂本屋仲間記録』裁配帳に、天保九年付けで天満屋安次郎の差入申一札が「一題林百人一首丸／一観世流番謡小形丸／右之板木所持主天満屋源次郎より慥成売上証文取置買受申候ニ付云々」と出ており、安次郎が板木を購入していることがわかる。

(4) 享保十六年刊『八千代百人一首』の頭書には「教訓伊呂波歌」が掲載されていた。

【翻刻】「いろは譬尽」

い　石のうへにも三ねん　（たとえ／上方）世話・国美
ろ　論語よみのろんごしらず　（たとえ／上方）・国美
は　八十の手ならひ　（たとえ／上方）・国美
に　二階から目ぐすりさす　（たとえ／上方）世話・国美
ほ　ほとけのかほも三度　（たとえ／上方）国美
へ　へたの的ははづれる　（ナシ）
と　とうとひ寺は門から見「ゆる」　（たとえ）世話
ち　ちゃうちんにつりかね　（たとえ）
り　利をつのって非におちる　（ナシ）

ぬ　ぬかぬ太刀の高みゃう　（たとえ）世話
る　類をもってあつまる　（上方）世話・国美
を　鬼の目にもなみた　（ナシ）世話
わ　わらふ門には福きたる　（たとえ／上方）国美
か　かべに馬をのりかけた　（たとえ）
よ　用心にはなはをはれ　（ナシ）世話
た　立よらは大木のかけ　（ナシ）世話
れ　両方きいて下知をなせ　（ナシ）世話
そ　そんすりゃ徳する　（ナシ）国美
つ　月夜に釜をぬかれた　（たとえ／上方／江戸）世話
ね　ねこに小ばん　（たとえ／上方）国美
な　ならわぬ経はよまれぬ　（ナシ）
ら　らいねんの事いや鬼がわらふ　（上方）世話・国美
む　むぎめしで鯉つる　（ナシ）世話
う　牛に引れて善光寺まいり　（ナシ）世話
ゐ　いわしのかしらも信心から　（たとえ／上方）
の　のらの節句ばたらき　（たとえ／上方）
お　おふた時に笠ぬげ　（たとえ／上方）国美
く　くはほうは寝てまて　（たとえ／上方）
や　山のいもがうなぎになる　（ナシ）世話
ま　まかぬ種ははへぬ　（上方）
け　下戸とはけものはない物　（ナシ）世話
ふ　富士の山をありがせゝる　（ナシ）世話
こ　ごまめもとゝまぜり　（たとえ）
え　ゑやうには餅のかは　（上方）
て　寺からさとへ　（上方）
あ　蟻のあなから堤もくずれる　（ナシ）
さ　さほのさきに鈴　（上方）
き　きつね馬にのせた　（たとえ）
ゆ　ゆだんは大敵のもと　（江戸）世話
め　目くらのかきのぞき　（上方）
み　みゝとって鼻をかむ　（たとえ）
し　しゃくしぜう木　（ナシ）世話
ゑ　ゑんの下の舞　（たとえ／上方）
ひ　ひざともだんかう　（たとえ／上方）
も　もへくひには火がつきやすひ　（ナシ）
せ　背中にはらはかへられぬ　（江戸）
ず　すゞめの千声より鶴のひとこへ　（たとえ）世話

B「たとゑづくしいろは歌當和訓」

一

次に、雑多な「いろは短歌」の中で、非常にユニークな「たとゑづくしいろは歌當和訓」を紹介したい。一般の「いろは短歌」は、短歌形式で教訓を詠じたものがほとんどで、「いろはかるた」の参考資料にはなっても、直接的なことわざの資料としては使えなかった。しかしながらここに紹介する「たとゑづくしいろは歌當和訓」は、短歌の冒頭部に「いろはかるた」を巧妙に据えているので、「いろはかるた」の資料としても有効なのである。

ただし本資料は新発見ではなく、既に高橋愛次氏の『伊呂波考』（三省堂）の「拾遺」に翻刻付きで紹介されている。その解説には、

作者或は編者、刊行年月、板元など未詳である。巻頭欄外に「浪花」とある所から、大阪開板と想像されるだけで、調査する手掛りが全然ない。第一葉は低俗乃至野卑な歌が多く、第二葉に入ると殆ど総べてが日蓮を詠んでゐる。同一人の作品で、その前半と後半とがこのやうに異なるのは注目すべきであらう。伊呂波歌は何らかの意味で啓蒙、教訓的なのが普通であるが、「ぬ」「わ」等の歌は次に見る如く相当野卑なものである。猶、「ろ」のうち、□を付したる文字は補読による（本資料は山田先生を介して借覧するを得た若杉哲男氏の新収書に拠った）。

と記されている。また山田忠雄氏の「あとがき」にも、

「たとへ」と云へば、「いろは短歌」ではないが、たとゑづくしいろは歌當和訓（400～403ペ）の前半（第一丁表裏）に見る諺そのものに対して発せられた痛烈な皮肉を人は何と見るか？その深刻は次の二首に止めを刺す。

いしのうへ三年なんでいられふぞ　いちにちゐてもぢがおこるぞや

作者は私同様痔持ちであったのかもしれぬ

ほとけのかほもさんどおがめばほしいやら　ゆびのしかたはまるじるしかな

狂言「仏師」に承ける所が有るか？

と述べられていた。ここで興味深いのは、高橋氏の解説の中に、第一葉（第一丁）と第二葉（第二丁）の内実が大きく異なっていることが指摘されている点である。これについてもう少し考えてみたい。

実は今回紹介するものには、高橋氏の指摘されている日蓮関係のものは一切見当たらない。高橋氏の翻刻を見ると、なるほど「れ」の、

れ　れいざんはしやかのほけきやうときたまふ　それはてんじくみほとけのやま

以下、「京」の、

京　きやうしうをひらかせたまふおんそしは　あさひののぼるかうそにちれん

まで日蓮関係のものが続いており、これでは看板に偽りありということになりかねない。しかしながら同志社女子大学所蔵のものは、

れ　れんぎにてはらをきるとはよいかくご　いたふもなけにやみそもすれまい

とあって、「連木で腹を切る」が踏まえられているし、それ以下、最後の「京」も、

京　きやうにいなかくにぐによりもなにはづへ　くるとしばゐを見るがたのしみ

のように「京に田舎（あり）」が踏まえられており、明らかに異なっている。

この違いは、単純に異版が存在するということではあるまい。というのも、ちょうど二丁オモテが「れ」から始まっているからである。どうやら高橋氏の紹介されているものは、二丁目に日蓮のいろは短歌のようなものが合綴された取り合わせものではないだろうか。そう考えた方がすっきり説明が付くようだ。高橋氏の場合、他に同じ資料がなかったので比較することができず、取り合わせであることにも気づかなかったのであろう。

二

そうなると今回紹介する「たとゑづくしいろは歌當和訓」は、必ずしも百パーセント新出資料ではないものの、高橋氏の誤謬を正すのみならず、「れ」から「京」までは新資料ということになるかもしれない。そこで確認のため、時田昌瑞氏の『いろはカルタ辞典』（岩波書店）を参照してみたところ、末尾付録の「主要カルタ・史料解題」の「上方系」項に、

たとゑづくしいろは歌當和訓

短歌集。筆者不詳。天保年間（1830～44）刊行の嘶本『大寄嘶の尻馬おおよせはなしのしりうま』所収。ことわざ四八句をはめこんだ短歌を、いろは順に配列。たとえば「い」は「いしのうえ三ねんなんでいられふぞいちにちゐてもぢがおこるぞや」（石の上にも三年）。歌に詠み込まれた句の内訳は、〈上方系〉37、〈たとえ系〉11。特に注目されることは、〈上方系〉といっても従来知られていなかった初期の特殊なものだけに見られる句が少なくないこと。そして前身の〈たとえ系〉の句と重なること。また、この短歌集の表紙には絵札八枚がデザインとして用いられているが、その絵札には字句も書き込まれている。これは〈たとえ系〉に見られる形式で、この短歌集カルタが、〈たとえ系〉から〈上方系〉へ移行する過渡的な一種であった可能性を示している。

と解説されていた。これによれば時田氏は、単独の「たとゑづくしいろは歌當和訓」ではなく、『大寄嘶の尻馬おおよせはなしのしりうま』所収のものを御覧になったようである。ただしこれだけでは、それが本書と同じものかどうかは確認できそうもない。内訳として諺を「〈上方系〉37、〈たとえ系〉11」と分類しておられるので、少なくともここに日蓮関係のものは含まれていないようである。

また表紙の絵について、その絵札の形式から「この短歌集カルタが、〈たとえ系〉から〈上方系〉へ移行する過渡的な一種であった可能性を示している」とされているのは重要である。ただし表紙絵は、「つ」が「つゑのしたからもまはる子がかわいひ」と「つきよにかまぬかれた」が重複しており、また中に収録されていることわざと一致していないものもあるので、単なるデザインと見ておいた方が妥当かもしれない。

以上のことから、時田氏の紹介されている『大寄嘶の尻馬』所収の「たとゑづくしいろは歌當和訓」は、本書と同じであると思われるので、新資料ではかなったことになる。それにしても「いろはかるた」の成立過程を考える上で、看過できない貴重な資料であることは間違いあるまい。

ここで「たとゑづくしいろは歌當和訓」の簡単な書誌をあげておきたい。高橋氏は翻刻だけで、書誌は一切省略されているからである。同志社女子大学日本語日本文学科所蔵。他に影月堂にもある。寸法はタテ21.5cm×ヨコ15.1cm。全二丁。装丁は仮綴。表紙は本文共紙。一丁オモテの左側に、「たとゑづくしいろは歌當和訓（うたとうわくん）」という書名が記されており、右上には「新板」とある。枠外右に「浪花」とあることから、大阪で出版されたものであることがわかる。

一丁ウラから二丁ウラまでは二段組みで、上下段に各八首ずつ計十六首が順番に並べられている。枠外上部にそれぞれ上・中・下とあり、三面合わせてちょうど四十八首になるという構成である。具体的に「上」には「い」から「た」まで、「中」には「れ」から「ふ」まで、そして「下」には「こ」から「京」までが並んでいる。

丁付けを調べてみると、一丁ウラの欄外ノドの下側に「たとゑノ壱」と記されていた。また二丁ウラの欄外ノドの下側には「たとゑ　弐了」とあるので、全二丁で欠落はないことになる。

三

さて、本書はわずか二丁の冊子として、単独で売られたものと思われるが、他の冊子と合綴した形でも販売されたようである。それが時田氏の紹介されている『大寄噺の尻馬』である。この本の紹介は、雑誌「上方芸能」の62号から68号に翻刻付きで掲載されていた。「たとゑづくしいろは歌當和訓」についても68号(1)に見られるので、それと比較してみたところ、やはりまったく同じものであることが確認できた（微妙に翻刻が異なる）。

「たとゑづくしいろは歌當和訓」は、『大寄噺の尻馬』初編おどけおとしばなし類（桂文治作）の末尾に合綴されているものである。刊記には、

初編　おどけおとしばなし類　桂文治作
二編　おどけ女夫けんぐわ類　十扁舎一九作
三編　おどけ講釈合戦類　立田土瓶作
右之本御のぞみの御方様へは一冊づつのとぢわけ本にいたし御座候間何方の本や又ははんこやへも売出し置候間おどけ本安本と被仰下御手寄之本やはんこやに而御求可被下候尤四扁近日出板仕候
万草紙物　大坂道とんぼり戎橋南詰南へ入
尾張屋治三郎
おろし処　同道とんぼり日本橋南詰半丁東
本屋安兵衛板

と記されている。表紙の「浪花」も上方版（本屋安兵衛版か）で間違いなかった。作者の桂文治は噺家なので、「たとゑづくしいろは歌當和訓」も噺本の一つとして編纂されたことになる。

収録されていることわざは、上方版ということで上方かるたと共通するものが多いが、いくつかは特殊なものが含まれている。

「や」　やせぼうずときにあふ
「め」　めの正月
「き」　きにもちのなる
「を」　おにのめに見のこされ
「ふ」　ふねでふねこぐも
「み」　みそだまのせんだく

などは、かるたではほとんど見かけないものである。このうち「やせぼうずときにあふ」だけは、時田氏の『いろはカルタ辞典』「主要カルタ・史料解題」の中に共通するかるたが掲載されていた(2)。「みそだまのせんだく」は、鈴木棠三先生の『故事ことわざ辞典』（東京堂出版）・『続故事ことわざ辞典』（東京堂出版）にも出ておらず、かろうじて『日本国語大辞典』（小学館）で確認できたものである。

この種のものはほとんど調査が進んでいないので、重要な資料が未発見のまま眠っている可能性がある。もう少し時間をかけて資料を探してみたい。

〔注〕

（1）宮尾與男氏「上方噺家の噺本―『大寄噺の尻馬』―」上方芸能68・昭和55年11月

（2）時田氏はことわざの内訳を「〈上方系〉37、〈たとえ系〉11」とされているが、そこに入りそうもないものもあるので、どうやらこれは四八のことわざを単純に分類したものではなく、重複を含んでの数ではないだろうか。

【翻刻】「たとゑづくしいろは歌當和訓」

いいしのうへ三年なんでいられふぞ　いちにちゐてもぢがおこるぞや
ろろんごよみろんごしらずばろんはない　だんごくわぬはだんごきらいか
ははちじうの手ならひするはもつともじや　百にたらぬをぬけさくといふ
ににくまれごよにはゞかりてつへついて　ゑぢかりまたはほねうづきかな
ほほとけのかほもさんどおがめばほしいやら　ゆびのしかたはまるじるしかな
へへたくそのながいだんぎとやぶゐしやの　くすりはきかぬてんぐがつても
ととうじんのねごとはむりなちやりばなり　おかしいばかりわけがわからぬ
ちぢごくのさたもかねしだいなり大入の　しばいにひろふくたりのんだり
りりんげんはあせのごとくやたかみから　ころばしかけるわにとめどなし
ぬぬすびとのひるねのあてはいへぬしが　おとこのるすにかゝにいちやいちや
るるいをもつてあつまつてくる人のよく　どこへいたやら百りやうのとみ
をおにのめに見のこされたるみせつきが　どびんのやうなかほでおちやひく
わわかいときしんどいぜにをくめんして　すきなおやまをかうてするなり
かかわいこにたびをさすのはどうよくじや　にくうてならぬがきにつかわれ

よ　よめとうめきやつめはたしかまへのかゝ　さしかけがさのうちにのつしり
た　だいめうのひにくばるのはむりじやない　なぬかゞあいだつかるひぜんゆ
れ　れんぎにてはらをきるとはよいかくご　いたふもなけにやみそもすれまい
そ　そんもせにやとくもつかぬとたのもしに　たかふだいれるやけのやりくり
つ　つきよでもかまをぬかれたたわけもの　にようぼがいんであとはくらやみ
ね　ねこに小ばんこめろがもろたてうめいぐはん　なにゝきくやらかざかいで居る
な　なくこにもめあけとしかるおやのむり　おしやいんぼでなふてしあはせ
ら　らいねんのこといやおにもわらふのに　ねんぢうないてくらす百しやう
む　むまのみゝかぜになんぞをきいたやら　ときともなしにたいこうつなり
う　うぢのふてたまのこしなりとんとんとん　てうじやのひめにしのぶおとこしゆ
ゐ　いやいやにさんばいずやらさしみやら　あつかんかんでひとつおどろか
の　のみといやつちとあいづのふしんごや　ちよんのまもよしひとつさしがね
お　おにのこねまがごくらくじや一ぱいしよ　これがいのちのせんだくであろ
く　くさつてもたいをつゞくるちりめんの　めいしよめいしよにしきしたんざく
や　やせぼうずときにあふたるよどうしに　ぜんすへて居るごけのふるまひ
ま　まかぬたねはへぬはへぬとゆだんした　むすめのしだらおやのなんきん
け　げいはみをたすけてそしてかねもつて　しんだりくはんはまれなたてもの
ふ　ふねでふねこぐもこがすもわかいどし　ろよりかいよりつよいほばしら
こ　これにこりよどうさいぼうのどうらくで　だいこくさんとてらをかけおち
え　ゑんのしたまいばんまいばんごそつくは　ねこかいたちかそふかそじやないか
て　てらからにさとにあづかるむまれごを　ほとけのやうにいふもぜにだけ
あ　あきないはうしのよだれをねぶりつき　せつきのあてにつとめするなり
さ　さらにもゝもつともらしいげいこでも　さはればころぶそれがとうせい
き　きにもちのなるほどむまいいろごとを　せわするひとをあほがねてまつ
ゆ　ゆをわかしみづにしもふた二のかはり　いりよふきいてだんなめをむく
め　めの正月よめいりまへのしたてもの　しりもちついてめでたがりけり
み　みそだまのせんだくびなるあさかゝに　すのこんにやくのちはのあいさつ
し　しやくしをばぢやうぎにするもどうり也　くらいだをしがしわいたらたら
ゑ　ゑよふにはもちのかはよりつらのかは　いちまいむいてみつちやなをせよ
ひ　ひざがしらゑどのやくしやが大坂で　しびりきらしてきやうやおはりへ
も　もちはもちやけつなおやまにほれられて　かたいむすこがつけもちとなる
せ　せいはみちみんなかしこいさいくもの　その見せものはかございくから
す　すつぽんとつきよにくはすうしのくそ　むまいやつじやとひとはいふなり
京　きやうにいなかくにぐによりはなにはづへ　くるとしばゐを見るがたのしみ

【影印】「いろは譬尽」・「たとゑづくしいろは歌當和訓」

①「いろは譬尽」冒頭・いろは
②「いろは譬尽」にほへと・ちりぬる
③「いろは譬尽」をわかよ・たれそつ
④「いろは譬尽」ねならむ・うゐのお
⑤「いろは譬尽」くやまけ・ふこえて
⑥「いろは譬尽」あさきゆ・めみしゑ
⑦「いろは譬尽」ひもせす・末尾
⑧「たとゑづくしいろは歌當和訓」表紙
⑨「たとゑづくしいろは歌當和訓」上・中
⑩「たとゑづくしいろは歌當和訓」下

図　1

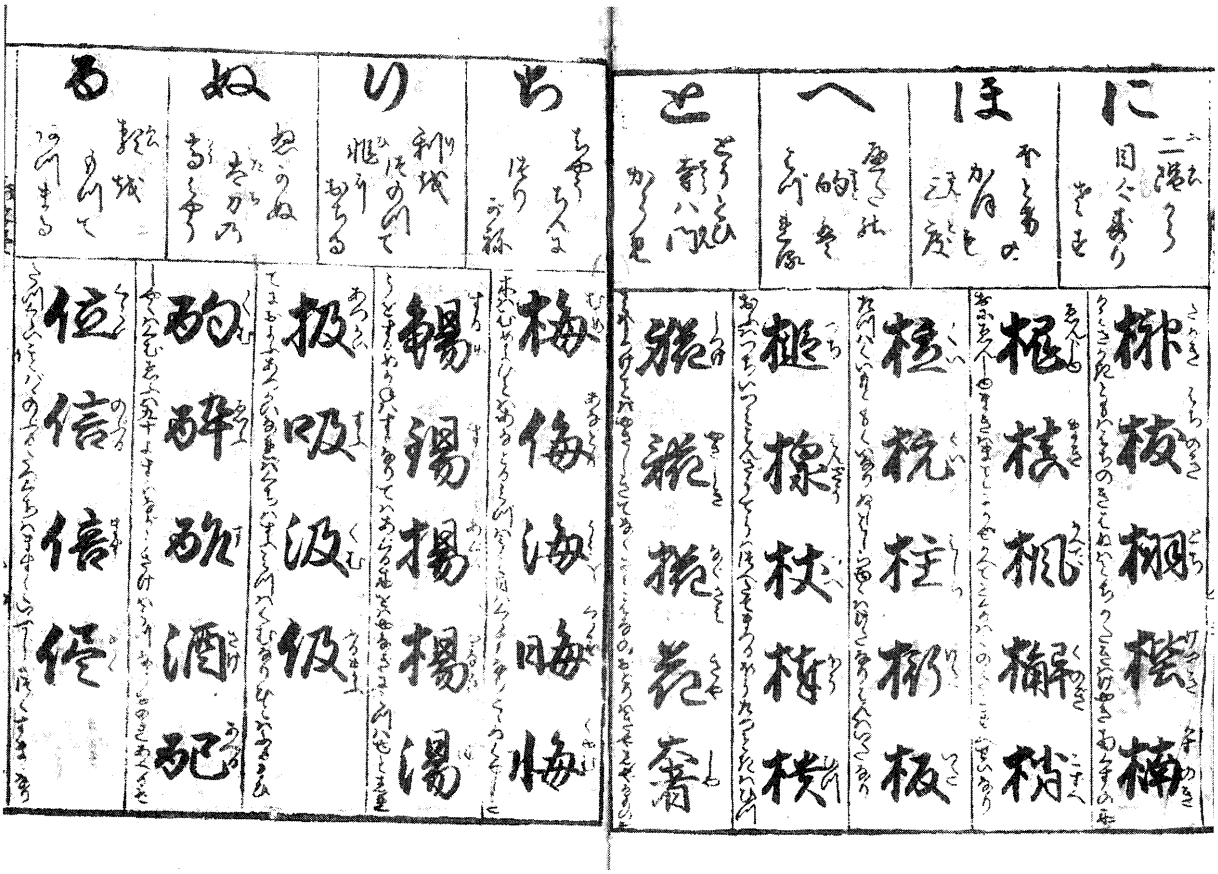

図　2

図 3

図 4

図　5

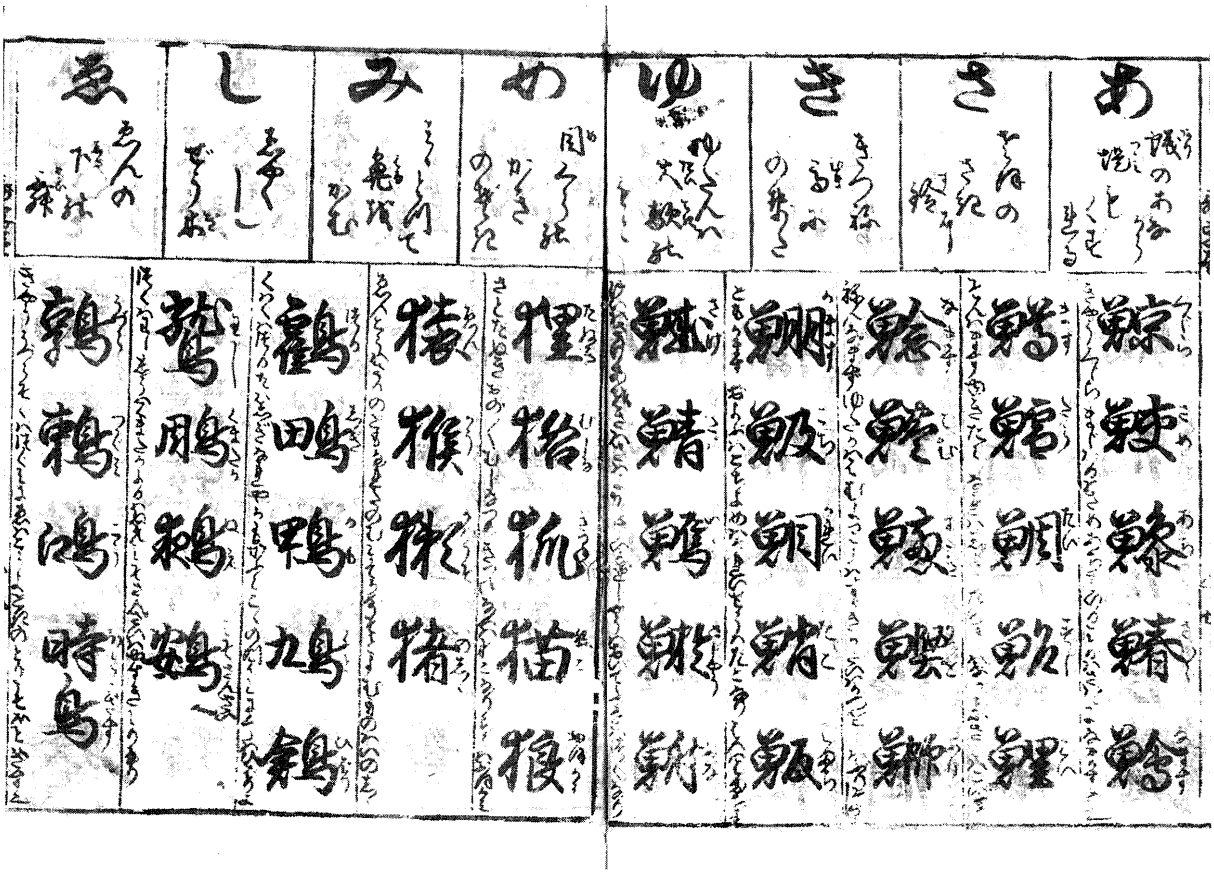

図　6

ひ
ふ
へ
ほ
イロハニホヘト
チリヌルヲワカ
ヨタレソツネナ
ラムウヰノオク
ヤマケフコエテ
アサキユメミシ
ヒモセス
ンメ
玉水源次郎新板

図 7

新板
浪花

図 8

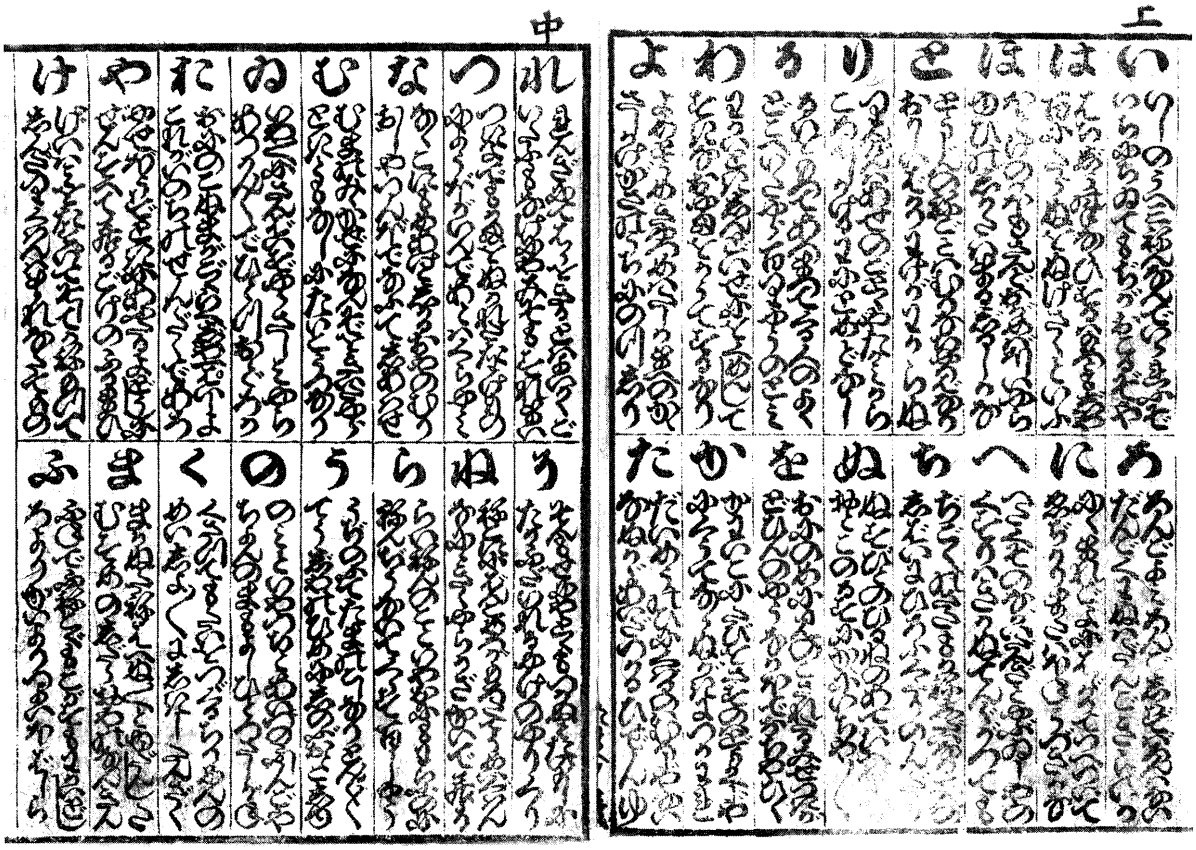

図　9

図　10